

## 奈良県立ろう学校訪問報告

実施日時：2018年10月25日（木）10:00～15:15

参加者：古石篤子（慶應義塾大学名誉教授）

河原雅浩・大山聡子（神奈川県聴覚障害者連盟）

竹内恵子・渡邊智子（神奈川手話通訳問題研究会）

### 1. 目的

私たちは、神戸大学教授河崎佳子氏の論文の「あとがき」に、「手話を駆使して教育を行っているろう学校」と書かれていた奈良県立ろう学校（以下「奈良ろう学校」）を訪問し、今後の神奈川県のあるろう学校の教育の在り方を考えるのに資することを目的に、手話による教育の現状を視察し、校長をはじめとする教員の方々のお話を伺った。

### 2. 報告

#### (1) 手話

児童生徒の手話の学習は、月1回程度、自立活動の時間において行われている。これは他のろう学校と同じである。

奈良ろう学校も全国の他のろう学校と同様に、昔は口話法により教育が行われていた。その後、キュードスピーチの方法を導入し、コミュニケーションの深まりや日本語の獲得の面で効果が見られた。その延長上で、さらにコミュニケーションを豊かに行うために、徐々に手話を使うようになって現在に至っている。このように、特にこれから手話を使うというようにはっきりと方針を打ち出して始めたわけではないとのことである。

教科として手話の時間を設けることに関して校長は、「現時点では、教科として手話の時間を設けることは難しい。何故なら、教科として手話の時間を設けるとなると、手話の教科の教員免許、教員養成も必要になってくる。そのことを考えると、今すぐにとするのは難しいのではないか。そのため、現在は自立活動の時間を活用して手話の学習を行っている」と語っていた。

#### (2) 教員

校長は、一時他の学校で勤務した時期もあったが、ろう学校勤務経験は長く、通算すると約30年になり、現在は隣接する奈良県立盲学校の校長も兼務している。

奈良県の場合は、一律に年数で異動させるのではなく、本人の希望及び学校の意向も考慮して異動を行っているので、校長の他にも、多くの教員が10年以上など比較的長く勤務しており、手話の能力はもちろん、ろう教育の専門家としての意識をもつ者も多い。

現在、聴覚障害を持つ教職員は教員6人、事務員1人、計7人で、奈良ろう学校の

卒業生が多い。見学に行った時も、翌週から卒業生 2 人が教育実習に来るとのことであった。

このように、卒業生が母校に教師として戻ることも奈良ろう学校の方針が受け継がれている要因の一つになっていると感じた。

### (3) 教員の研修

新しく赴任してきた教員で手話を知らない教員に対しては、年間 20 回程度の校内手話学習会を開催し、そこで手話を学習してもらっている。その他、一緒に仕事をしているろう教員や児童生徒に教わりながら習得している。教員の中には、自主的に地域の手話サークルに通ったりしている人もいる。

手話学習会の講師はろう学校内のろう教員が担っているが、ろう教員は「やはり、ろう学校に赴任する前に研修で手話を身につけてから来てほしいと思う」と語っていた。

コミュニケーション方法以外の面でも、指導方法や、聞こえない子どもに対する資料の提示の仕方などろう学校教員が注意すべき点について、学内研修で指導している。

### (4) 医療機関との連携

奈良県内の耳鼻科医師 2 人や保健師等と連携をとっており、聴覚に障害のあると診断された乳幼児のケースのほとんどがろう学校に相談に来るようになっている。

### (5) 人工内耳・補聴器

数年前に奈良県内の病院でも手術可能になり、それ以降、人工内耳装用児の数は増えている。現在は学校在籍児童生徒 109 人のうち 31 人が人工内耳を装用している。

ろう学校としては、人工内耳を装用するかどうかについては特に助言はしていないが、装用したとしても、完全に聞こえ、しゃべれるようになれるわけではなく、補聴器と同じであることを説明している。

乳幼児、幼稚部の教員の話では、「人工内耳を装用している子や聴力の軽い子で口話でのコミュニケーションが可能であっても、手話は必要であると考えているので、人工内耳を装用している子や聴力の軽い子は口話、聴力が重い子は手話、というように分けることはしておらず、『共通言語は手話』という方針のもとに、手話を基本として口話、音声など可能な手段を駆使してコミュニケーションを行っている」とのことであった。また、「社会に出れば少数派の彼らを分断させるようなことはしたくない。そのためにも共通言語としての手話は必要であると考えています」とも語っていた。

補聴器の使用に関しては、特に装用を強制するようなことはしておらず、子どもとその保護者の判断に委ねているとのことであり、補聴器を装用していない児童も何人かいた。

#### (4) 地域支援

奈良ろう学校でも、地域の普通学校へ転出する児童生徒はいる。そういった児童生徒や、地域の学校に在籍している難聴児を支援するために、在籍する学校の教員の理解・専門性の向上を図るための研修会の開催、情報提供、講師派遣などを行っている。

### 3. 感想

まず、校長がお会いした最初から最後まで、話をするときには必ず手話をつけるようにしていたこと、また、子どもたちが教室で伸び伸びとしていたことが非常に印象的だった。

授業風景を見ていると、手話で内容を理解させるとともに、内容と日本語を結びつけて日本語もしっかりと理解させ、日本語の言葉を教えるときも言葉だけ覚えるのではなく、言葉の意味を手話で表現させて意味も理解させるようにするなど、日本語と手話の両方ともに身につけられるような工夫が行われていると感じた。

また、ある生徒と教師がやりとりをしているときに、それに対して他の生徒が意見を言ったりするなど、教室内のコミュニケーションが活発であった。これは教師と生徒とのやり取りの時は1対1でのやり取りになりがちだった従来のろう学校と大きく違う風景であり、幼稚部段階から教師との間のコミュニケーションだけでなく、児童相互間や全員でのコミュニケーションを重視してきたことの効果が表れているのではないかと思う。

幼稚部を見学に行ったとき、比較的聴力があると思われる幼児が最初は声で話しかけてきたが、見学者が聞こえないと分かるとすぐ手話に切り換えた。このように相手や場面によって自然にコミュニケーション手段を使い分けることができるようになっていることは、将来社会に出た時に非常に重要なことであると感じた。

また、児童生徒にこのようなコミュニケーション能力があることにより、新しく赴任してきた手話がわからない教員にとっても児童生徒とのコミュニケーションが取りやすく、その中で手話を覚えていくことが容易になっているのではないかと思われる。このことが奈良ろう学校教員の手話力の向上につながっているといえるであろう。

これらのことは、学内の共通言語はあくまでも手話という基本方針を基に、「コミュニケーション力をつけること（どのような手段を使っても相手と意思疎通をすることを重視）」及び「学力をつけること」を2つの大きな目標として掲げ、児童生徒中心の教育が行われていることによるものであろう。

このような教育を行うためには、ろう教育の専門家としての意識をもった教員が必要であるが、奈良ろう学校の場合は比較的長く勤務し、そのような専門家意識をもった教員が多いことがそれを可能にしている。このことは、他の自治体では全く考慮もされず実施もされていないことである。

また、教員間の意思疎通がきちんとできていて、聞えない児童生徒に対する教授法などについても意見交換や学内研修などがしっかり行われていることも素晴らしいと感じた。

校長によると「まだ課題は山積している」ということであったが、これまで見学したろう学校とは違ったすばらしい面が非常に多く、おそらく公立のろう学校で現在考えられる最高の教育がなされていると思う。その意味で、これからの神奈川県のあるべき姿について多くの示唆を得られた有意義な見学であった。

以上。